誌上法話　Ｈ２１／９／１　三浦恵伸

金槌は藻掻き

熊本県の南部にポッカリと、お椀のように口を開けた球磨盆地の中央を、東の九州山地から西の有明海へ駆けるように下る、球磨川（日本三大急流）が流れています。私はその地で生まれました。

兄達は幅百㍍余を蕩々と流れるその川に、颯爽と挑み、スイスイと泳ぎ切って行きます。私は小中学生時代カナヅチで、憧れていました。六年生の夏、私は兄や友人と支流で水遊び中に、蛇行している深みにはまり溺れました。川面からは屈折した太陽光が差し込み、ブクブクと泡が上昇していきます。藻掻くほどに川底に尻を着き、もうこれで終わりだと思いました。しかし、兄（憲覚師）が救ってくれたのです。

釜石では根浜海岸など、海水浴で師匠に随行し、ご夫妻も水着で一緒に遊びました。私の四人の子供は、小学校で水泳指導に勝れた教師に恵まれ、綺麗に泳ぐので感謝しています。

そう言えば、「御遺文全」の編纂主任であった霊断師会創祖・聖徒団総本部初代首導・高佐日煌聖人にも同じような出来事があったと言います。

鎌倉・長勝寺で若い研究者（後に管長・総長となった方々）を率いての校正中に、材木座海岸の潮風に惹かれ休憩をとります。泳者は海中に、創祖は砂浜の人となり、眺望を楽しんでいました。

処が、一瞬で景色が変わり、今まで座っていた浜辺が見る見る遠ざかります。高波に襲われ沖へ流されていたのです。藻掻くほどに体は沈み、陽光が薄くなります。これまでの人生が走馬燈のよ

うに駆け巡り、自分はまだまだ志し半ばである。だが、個人的には久遠の命を知ったので、今となってはカナヅチで致し方ないと観念できる。だがだが、何としても幼い子供を残して逝くのは残念だ、よし、最後に一度だけ上昇を試みようと、満身の力を込め両足で海底の砂を蹴りました。

不思議、顔が海面に浮き出るや、眼前に白い四角の救命ボードが差し出され、とっさにしがみつきます。男性が静かに語りかけました。「今、遭難者があって捜索中ですが、年格好が貴方ではありません。しかし、これから貴方を浜辺まで誘導しますから、しっかり掴まっていて下さい。」創祖は九死に一生を得て一息つくや、男性は踵（きびす）を返して救助の為去って行きました。お礼も述べず、名前も聞くことが出来ませんでした。

当（まさ）に倶生霊神による変化（へんげ）の人だったと言わなければなりません。この方無くして、今の霊断師会・聖徒団は無いのです。

泳者は水に委（ゆだ）ねる

カナヅチは海に投げられれば藻掻き沈みます。泳者は逆らわず一度水に沈みます。水が浮かせてくれる事を知っている、信じているから全部を委ねる事が出来るのです。浮き上がってから、さて、クロールで行くか、平泳ぎか、ひっくり返って背泳ぎで行くかを決めています。

私も後に陸中海岸で布教することになり、漁師の方に、顔を水に浸け、口に半分水を含んで泳ぐと疲れないことを教わりました。今は若干泳げます。

人生の波濤を泳ぐ

現代は、科学文化が高度に発達した一方で、ストレス社会と言って、皆、身心共に疲れ果てているようです。昔は弱肉強食の時代で自分だけが頼りでしたが、今は法治国家で社会が安全を保証する建前です。しかし、年と共にその機構は複雑化．機械化して、人間関係は希薄になりました。人が孤立しています。

故に内向しますが、頼れるものを見出すことは出来ません。趣味等を見つけた人は幸いです。そうでない人は更に不安がつのります。加えて、私達の人生は数々の運命に翻弄されます。耐えきれない人は、鬱病になるか、社会に対し攻撃的になるかを選択するようです。

ホット一息つく安心が、遠ざかっている様に感じられるのです。その様な社会相に在って、

先ずは浮くこと

九識霊断法．倶生霊神符の霊験．奇蹟に触れて、信心を深め、盛運祈願祭．各種研修会の聴講．聖徒団の護持等、行学の二道に励み、　誓って南無妙法蓮華経の道を、持ち．行い．護り．弘め奉らん。」の三大秘法の正信に生きている、聖徒の皆様の心の内は、何とも穏やかではないでしょうか。

ご本尊様に強く守られているという、その安心こそが、お題目の海に浮かばせて戴いていることの証しなのです。

子供に水泳を教える時に、先ず浮く事から教えるように、人生を安穏に泳ぎ切る術を大切な子孫．社会に伝えなければなりません。

南無妙法蓮華経